史跡大安寺旧境内　講堂跡の調査

大安寺二丁目

大安寺の講堂跡は、大安寺小学校運動場の東側部分の地下に残っています。寺内の僧侶が集まって、仏教の講義を聞き論議をしたりする教室のような建物が講堂で、寺内で最も規模が大きかったことが『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』からわかります。その規模は、東西 14 丈 6 尺（約 43.2m）・南北 9 丈 2 尺（約 27.2m）もありました。

講堂跡の発掘調査は昭和 38 年と 41 年に小学校改築に伴って初めて行われました。基壇西辺及び南西隅の延石、南面階段の痕跡、講堂南西隅柱の礎石の根がため石などが確認されています。この時、北西隅まで延石列を追及しようと現運動場北端に流れる東西水路の際まで発掘しましたが、確認できませんでした。

昭和 56 年にこの水路拡幅の計画があり、事前の確認調査（市第 3 次調査）を実施して基壇北辺の延石列が見つかりました。しかし、以前の調査場所との位置関係がよくわからなくなっており、講堂跡を正確に復原できない状況となっていました。

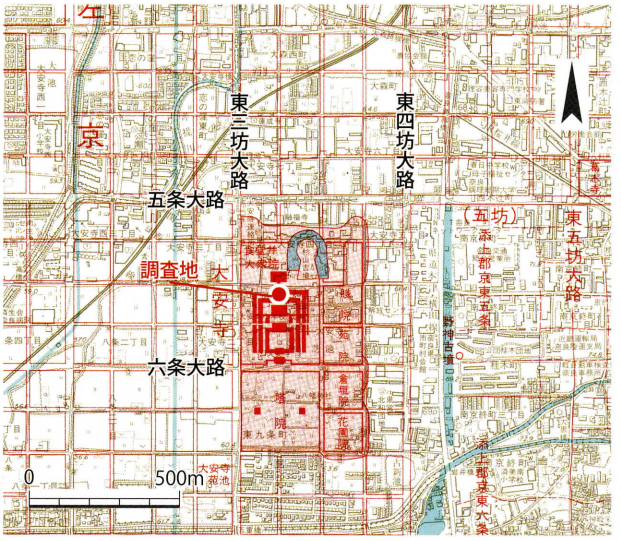
平成 27・28 年度、水路改修に伴いその南北に沿って発掘調査を実施したところ、基壇北辺の延石列 15.6m分が断続的に残っていました。そして、昭和 38 年の調査箇所を一部再発掘し、以前調査された西辺延石列の位置を確認することができました。それによって、講堂基壇の北・西・南の 3 辺の位置がほぼ確定し、推定できる伽藍中軸線で左右対称に西辺を東へ折り返して東辺の位置を求めることができるようになりました。

講堂基壇の規模と構造

復原できる講堂基壇の規模は、東西長 49.9m前後、南北長 34.2mです。基壇の外装は凝灰岩の切石を使用した最も格式の高い壇正積でした。

講堂が造られている地盤は、東から西へと下がっています。そのため、東側では地山を削り出し、西側では盛土して基壇の基底部を水平に造成したうえで延石を並べています。地盤が安定していたためか、掘り込み地業は行なわれていません。

延石は、最も残りのよい箇所で長さ 1.1m前後、幅 0.5m、高さ 0.16mです。外側へ向かって内湾気味に表面が削れていますが、内周に沿って約 5 cm幅の平坦面が残っています。地覆石が載っていた痕跡と考えられ、地覆石からの出は 0.45mと推測できます。現存する基壇の高さは、延石底から



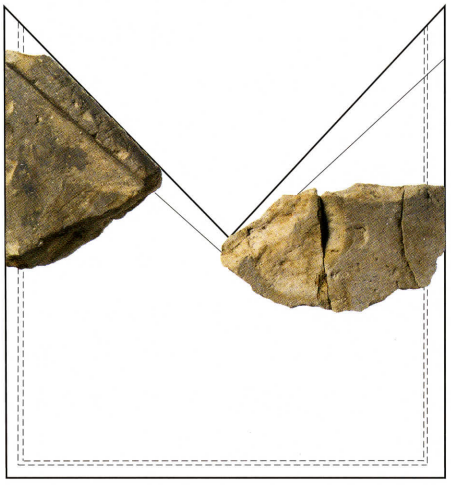
調査地位置図(1/25,000)

大安寺小学校運動場の地下に残る講堂基壇北辺延石列

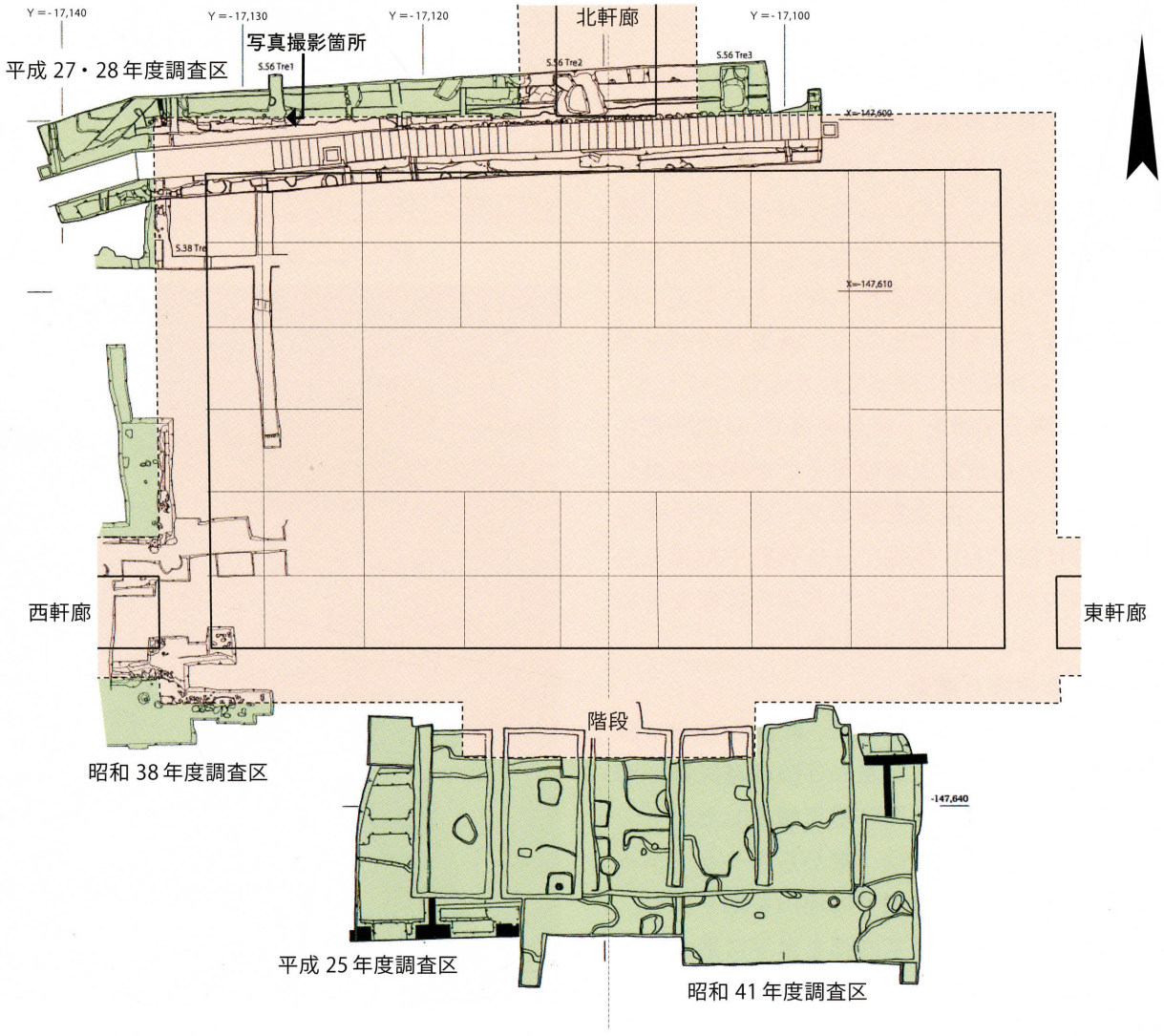
はかっても 0.3m前後しか残っておらず、残念ながら北西隅の延石はすでに失われていました。昭和 41 年の調査で見つかったとされている基壇南面の階段痕跡は伽藍中軸線で折り返すと左右対称となりません。また、階段の出が３m以上となり、同時期の寺院例からみると大き過ぎるので、階段痕跡の規模については再検証が必要です。

講堂には西・東・北面に軒廊が取り付きます。西面軒廊の梁間が 4.2m（14 尺）と発掘調査で確認され、北面軒廊の梁間が 5.4m（18 尺）と『資財帳』から推定できます。軒廊が取り付く箇所の柱間寸法は同じであった可能性が高く、それを考慮して東西９間・南北６間で講堂の柱間を推定すると図のように復原できます。

注目できる遺物として、基壇北西隅近くから出土した隅木蓋瓦があります。復原幅は 57 cm前後で、平城宮第二次大極殿出土資料を超える大きさです。平城宮第二次大極殿を少し超える規模であった講堂の巨大さを物語る資料と言えるでしょう。



出土隅木蓋瓦復原図(1/10)



講堂推定位置と発掘区(1/400)